

スキー史の誕生

新井 博（びわこ成蹊スポーツ大学）

はじめに

1991 年日本スキー学会(以下、本学会)の誕生によって、日本でスキー史に関する研究が本格的に始まったことについて、この間のスキー史研究の歴史的経緯から明らかにしたい。とりわけ、本学会が誕生する以前の研究と以後の研究の変化からみていきたい。

本学会が誕生する以前の研究は、歴史的な研究の数が少なかったばかりか、歴史学といった科学について、あまり意識をしていなかった。ところが、本学会が誕生した後の研究は、単にスキーの歴史を綴ったものではなく、学問としての体裁を重んじるようになり、数も増えている。具体的に言えば、個々の研究が歴史研究のスタイルを取り、他者の批判や意見に触れる場面を持ち、一定の科学化のフィルターを通過した研究となってきたのである。

ここでの作業は、本学会誕生以前と以後の研究の相違について、スキー史研究を様々な角度から眺めてみることによって検証していきたい。

I、各学会の中での歴史的研究の位置

日本には 1990 年代前半まで、日本体育学会を除いて、体育・スポーツを冠とした学会がなかった。当然、それに準じた学会誌も存在してなかった。それはとりもなおさず、スポーツに関する学問研究の広がりが小さかったことを意味していた。

ところが、国民の生活水準の向上と共にスポーツの国民的な隆盛を背景にして、1990 年以降スポーツ種目による学会が誕生するようになった。勿論、各学会誌も発行されるようになった。例えば、本学会(1991)のほかに、ゴルフ学会(1987)、日本テニス学会(1989)、日本ランニング学会(1991)、日本バレーボール学会(1995)、日本水中運動学会(1998)、日本体操学会(2003)、日本

フットボール学会(2004)などが誕生してきた。

それによって、各スポーツ分野の研究が全体的に進んだと言える。しかし、各々の学会誌を見渡しても、それぞれの分野で歴史に関する研究は、極めて少ない状況といえる。

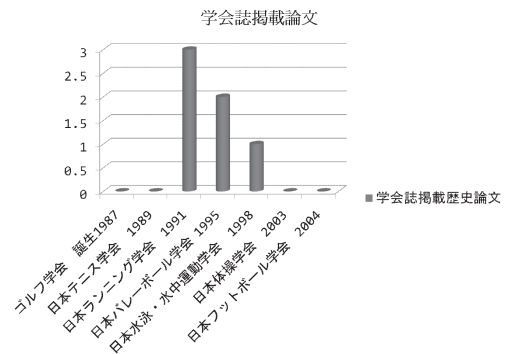


図 1. スポーツ種目別の学会と歴史論文

概略的ではあるが、日本ランニング学会 3 編(「ランニングにおける 80 年代の回顧―画期としての 80 年代―」「歴代記録からみた日本のマラソン」)、日本バレーボール学会 2 編(「バレーボールの歩みと今後の動向」「バレーボール人生 50 年史の一コマ― チームづくりから審判まで―」)、日本水泳学会 1 編(「ベビースイミングの歴史」)が、近年みられただけである。

II、本学会誕生以前のスキー史研究

(1) 本学会誕生以前のスキー史研究

ここでは、1991 年に本学会が誕生する以前に行われたスキー史研究の特徴をみてみよう。まず、どのような研究があるかと言えば、代表的なものには以下のものがある。

表 1. 本学会誕生以前のスキー史研究

タ イ ト ル	年	著 者
日本スキー発達史	1936	山崎紫峰

日本スキー発達史	1956	小川勝次
スキーの黎明	1957	中野理
スキーの誕生	1964	中野理
明治日本の思い出	1970	中野理
スキー三国志	1970	瓜生卓造
スキー誕生と文明開化	1971	福岡孝行
スキー事始めと乃木大将	1971	坂部護郎
発掘・日本スキー用具発達史	1972	瓜生卓造
スキー風土記	1978	瓜生卓造
日本近代スキーの発祥展開	1979	長岡忠一
北海道のスキーづくり	1983	佐藤徹雄
日本スキー事始め	1989	長岡忠一
盛岡スキーエリア風土記	1989	村井正衛

さらに、本学会誕生以前のスキー史研究を年代ごとにまとめると右の図2のようになる。

スキー史の研究は、1970年代以降増加した。背景にあるのは、1960年代から始まるスキーの大衆化現象と、1972年に札幌冬季オリンピック大会の開催によって、日本に空前のスキーブームが到来したことが存在している。

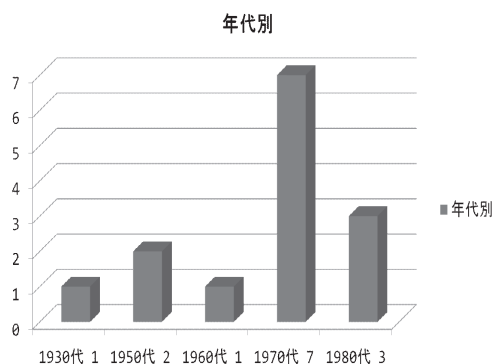


図2. 本学会誕生以前のスキー史研究

スキーが、位置部のエリート階層のスポーツか

ら、市民のスポーツに代わることによって、多くの市民によってスキーの技術や指導への関心と同じような、強い関心が歴史にも寄せられるようになったのである。それらが根底にあり、スキー史研究者の増加や多くのスキーにおける歴史的謎への挑戦が始まったのである。

(2) 本学会誕生以前の研究の特徴

本学会が誕生する以前に、綴られたスキーに関する歴史研究の数と言えば、見落としを恐れずに言えば、おおよそ、図3のようになります。

スキーの誕生史が6編、地方史が3編、個別史が3編、通史が2編であった。また、各研究の行われた内容的な特徴は、以下に示すようであった。

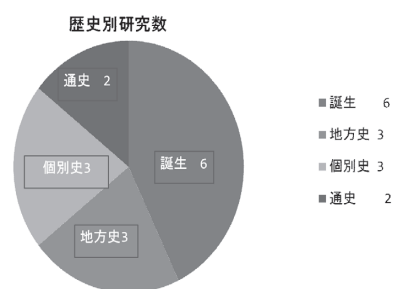


図3 本学会誕生以前の歴史研究

1)誕生史の特徴

1960-70年代に、小川勝次、中野理、瓜生卓造、福岡孝行等によって、日本スキーの誕生について研究されたものである。それらの特徴は、日本スキー誕生に関するものである。スキーがどの様に日本に導入され、発達したのかに日本スキーの誕生期に焦点が当てられていた。

2)地方史の特徴

1970-80年代にはいり、スキーが全国的なブームとなると、日本の発祥に焦点を当てたものから、各人々の住む、いわゆる自分の地域、また特徴のある地域のスキーの歴史に興味を持たれるようになる。

それによって、結果として広い地域のスキー史に焦点が当てられるようになった。各県に誕生したスキー連盟が、「県スキー連盟 30 年史」や「県スキー史」を編纂し始めたのである。

3)個別史の特徴

1970-80 年以降ますますスキーが人々の間で盛んになると、瓜生の『発掘・日本スキー用具発達史』や佐藤の『北海道のスキーづくり』など、用具などの個別の歴史も研究対象とされるようになった。そこには、スキー産業といった産業の確立や読者の関心の広がりがあった。しかし、必ずしも個別史も豊富な内容ではなかった。

4)通史の特徴

他の学問分野における歴史研究と同様に、スキー史においても、最初は通史の研究が行われた。

II、本学会誕生後のスキー史研究

1991 年に本学会が誕生してから、本学会で発表・執筆されたスキー史研究は、以下のようである(テーマと研究者のみ記載)。

日本スキー学会 1994

- アルペンスキーの原典に関する研究—M.Zdarsky による“Die Lilienfeldep Skilau-Technik”について—
池田弘一・中浦皓至
- "Kajyu (Weigting) の史的考察、中浦皓至
- 明治末期の新潟県高田におけるスキー製造販売業の誕生に関する研究、新井博
- ゼッケンの語源について、野沢巖・藤原直紀・福島邦男・野沢明江

日本スキー学会 1995

- 小原國芳がハンネス・シュナイダーを日本に招聘した経緯に関する史的考察(第1報～第2報)、酒井繁
- 樺太スキー倶楽部による大正2年の指導者講習会
新井博
- アルペンスキーの歴史—アルペンスキーの創始から日本への導入—、池田弘一・中浦皓至

日本スキー学会 1996

- レルヒ中佐によるエゾ富士スキー登頂の再検討、中浦皓

至・青木文男

- ナンセンのグリーンランド横断におけるスキーの利用について、池田弘一・中浦皓至

- 明治44年2月11日開催第1回樺太島技大運動会の持つ意味、新井博

日本スキー学会 1997

- アルペンスキー技術が創られて100年—Zdarsky 技術と発祥期の日本スキー技術の関連を考察する—
中浦皓至、青木文男、池田弘一
- 日本スキーの開拓者桜庭留三郎、新井博

日本スキー学会誌 1998

- 大正12年第一回全日本スキー選手権大会参加への樺太の取組みについて—桜庭留三郎を初めとする選手の選考を中心として— 新井 博
- 日本スキー史の検証[第1報] ノルウェースキー技術の導入について、中浦皓至、池田弘一、青木文男

日本スキー学会 1999

- 日本スキー史の検証[第2報] 小樽におけるスキー草創期の研究、中浦皓至、池田弘一、青木文男
- 樺太におけるノルウェー式スキー術の導入と普及について—金井勝三郎の大正4年から大正6年における活動を中心—、新井 博
- 歴史的研究、中浦皓至
- 地方における小規模スキー製造販売業に関する研究 昭和初期福井県の廣川・中西スキー制作所について
新井博
- 札幌の中等学校スキー部の創設とその活動についての研究—北大スキーと共に札幌スキーを発展させたもう一つの源流— 中浦皓至
- アルペンスキーの英語の原典に関する研究—E.C.Richardson の SKI=RUNNING について—
池田弘一・中浦皓至

日本スキー学会 2000

- 「スキー史研究の現状と課題」、中浦 皓至
- 「スキーの探求に捧げた一生」、三浦 敬三
シンポジウム 「スキーの歴史」
- 「アルペンスキー技術の発達過程」—中部ヨーロッパにおける揺籃期から T.E.V.レルヒの来日期まで—、池田弘一
- 「福井県の用具供給体制の確立課程とスキーの定着の関係」、新井 博

●「1960年代から現在まで、約40年間のスキー技術の変遷」、
青木文男

●「日本におけるスキー場開発史とスキー市場の動向」
呉羽正昭

●日本の古代スキーとその自然環境、白坂 蕃

●ハンネス・シュナイダーがアメリカのスキーに与えた
影響について—その1 シュナイダーの生い立ちとスキー
学校開設まで—、赤井利男

日本スキー学会 2001

●ハンネス・シュナイダーがアメリカのスキーに与えた影
響について—その2 アールベルグスキーテクニックと
指導法の開発を中心として—、赤井利男

●日本スキー史の検証（第4報）長野県におけるスキー発
祥期の研究、中浦皓至、池田弘一、青木文男

日本スキー学会 2002

●中部ヨーロッパのスキー発祥地リリエンフェルトとシュ
バルツバルトの対比、赤間 寛、池田弘一

●日本スキー史の検証〔第5報〕黎明期における競技スキー
史の研究（1）、中浦皓至、池田弘一、青木文男

●日本のスキー普及期におけるスキー場—福井県のスキー
場の場合から— 新井 博

●草の根、竹田蘊蔵そして小笠原二郎のこと—スキー大館
の夜明け、竹田から小笠原に至る歩み— 田所勝太郎

●スキー導入初期の高田13師団行軍経路を辿る—90年前
の行軍経路を踏査してみても— 土屋晴夫、杉山 進、藤
原正孝、伊知地信人、武藤恭雄

日本スキー学会 2003

●秋田県における昭和7～8年頃のスキー論争について
—ノルウェースキー術とアールベルグスキー術との見解
の相違から— 田所勝太郎

日本スキー学会 2004

●来日以来のスキー家としてのテオドル・フォン・レル
ヒ 新井 博

日本スキー学会 2005

連載 ハンス・コラーと日本のスキー発祥 中浦皓至

●Der Winter 誌における高田からのレルヒの報告について
池田弘一

●ハンネス・シュナイダーのスキー映画について
中浦皓至

日本スキー学会 2006

●上原勇作と旭川のスキー前史 中浦皓至

●大正時代における大湊要港部の海軍スキーについて
中浦皓至

●レルヒの誕生と就学 新井 博

日本スキー学会 2007

●連載 札幌近郊のシャンツェ発祥史 中浦皓至

●レルヒによる高田でのスキー講習開催までの経緯
新井 博

●関西スキーの父中山再次郎のスキー習得について
中浦皓至

日本スキー学会 2008

●高田における日本スキー発祥史の再検討 —明治44年の
第1回スキー講習会を中心に— 中浦皓至

●高田第十三師団による明治45年度のスキー講習会 —各
衛戍地で開かれた伝達スキー講習会について—中浦皓至

●レルヒ少佐の日本からの帰国とその後 新井 博

日本スキー学会 2009

●連載 明治44-45年の日本スキー発祥に関する文献批判-
レルヒによる4回のスキー講習会を検証する—中浦皓至

●樺太における一本杖から二本杖へのスキー技術の変化に
ついて 新井 博

●会津におけるレルヒ少佐の行動抄 池田 弘一

●高田師団による明治45年1月スキー講習会—高田・小千
谷教習場の民間人参加者を中心に—中浦皓至

上記の研究から、以下のことが分かる。まず、
日本のスキーについて行われた歴史研究と、外
国のスキーについて行われた歴史研究を数で比
較すると、日本について45編、外国について8
編である。日本についてのスキー史研究が、圧
倒的に多いことが分かる。

といっても、本学会が誕生するまでは外国の
スキーについての研究が殆ど行われておらず、
行われるようになったことは、やはり学会が誕
生してからの大きな特徴と言ってよい。

また、日本のスキーについて行われた歴史研
究と、外国のスキーについて行われた歴史研究
の年代的な変化をみると、図2のようになる。

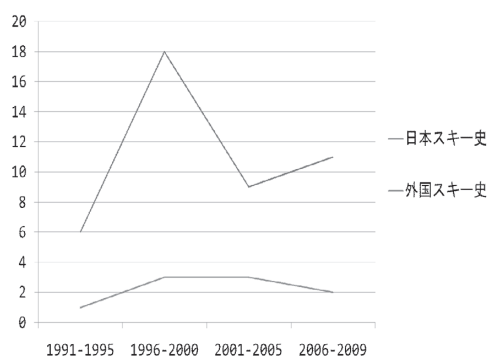
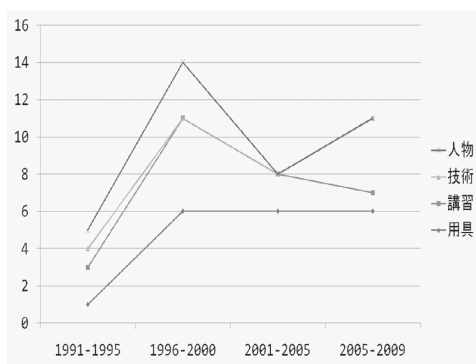


図4 日本スキーと外国スキー研究の関係

1990年代に大きな伸びを見せながら以後退潮傾向を示している現象は、本学会誕生後、本学会の活動が盛んになり、多くの研究者が日本のスキーについての歴史研究を行ったことがあげられる。しかしながら、2000年以降衰退する理由は、日本のスキー史研究者の平均年齢が比較的高く、2000年以降研究がストップしていること。また、引き継ぐ若い研究者が育っていないことによっている。

さらに、中でも多い研究の歴史的な推移をみると図5のようである。



2000年を過ぎると人物に関する研究は一時落ち込むが、再び伸びる。しかし、外の研究は、横ばいか、或いは衰退している。

続いて、研究テーマの広がりについてみると、下の図3のように多くのテーマに広がっている。これは、本学会が誕生する以前の研究テーマが、誕生期の内容に集約されていたことに比べると、本学会誕生以後、人物史、技術、講習、用具、スキー場、軍隊など多彩な内容に広がっていることが分かる。この現象は、

本学会の誕生によって学会としての存在が、地理学、観光、用具など多くの分野の研究者を本学会に注目させることになり、研究の幅が生じたことによるものである。また、学会での論議や研究の深まりが、拙速な研究ではなく、新たな分野の研究の必要をつきつけることになり、テーマの広がり結びついたと言える。

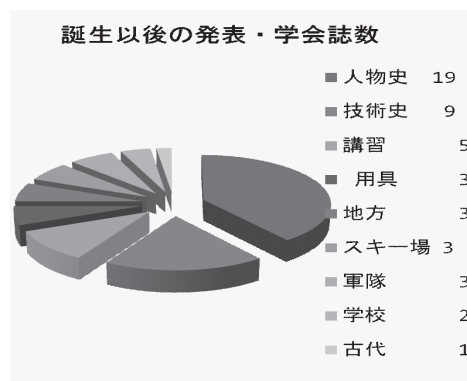


図6 本学会誕生後の研究内容

まとめ

①研究者、②研究の内容、③研究の精度について、本学会の誕生以前と以後を比較すると次のようであった。

以前は、①研究者が少なくために、成果が少い。②研究の内容に広がりが無い。③資料の扱い・論理などについて、研究の精度にあまさがあつた。

以後は、①研究者の数が若干増えた。そのことから成果もあがった。②研究の内容に、バリエーションがでてきた。③研究の精度が意識され、全体的に向上している。

今後の課題である研究者養成と今後の方向については、以下の方策が考えられる。①研究者の増加のために、研究しやすい研究の方向を考える。例えば、現代史、スノーボードなど。取り組みやすい内容を若手の研究者がとりくめる基盤づくりを進めていく。具体的には、若手育成を学会で組織的に行う。②他の研究分野との融合により、研究協力を図っていく。このことにより、魅力的な分野の構築をはかり、研究の幅を広げていく。